

地元就農による新たな可能性

農家離れが進む中、川崎町の新世代を代表する農家の藤枝拓磨さん(21)は、いちご農家として地元で就農した。

拓磨さんは農家で育ったが、中学生の時、県農業・園芸総合研究所のいちご栽培の見学をきっかけに、同町で生産が無かったいちごに着目。いちご農園での研修を経て、19歳の若さで家族とは別に「藤枝いちご農園」を立ち上げた。



開園当初は苦勞も多かったが、年々いちごの品質も向上し、現在では、舌が肥えた地元飲食店や農業関係者にもリピーターが多い。拓磨さんは「まだまだ大きさや糖度の向上を図っていきたい」と意欲的に将来のビジョンを語る。

宮城県は沿岸部にいちごの一大生産地があり、同町のような山間地での生産は不向きとされてきたが、寒暖差を利用し室温を独自にコントロールすることで、高品質ないちごの生産に成功した。

逆境の中でも地元新たな可能性を見出す新世代の農家に、関係者も期待している。

直売所＝川崎町大字川内字佐山5の1

1月から5月の火・金・日曜日の午前中のみ営業。